

「丹州山国境内之目録」について

―丹波国桑田郡山国莊（山国郷）の中近世移行期像再考に向けて―

吉岡 拓

はじめに

日本中世史研究において丹波国桑田郡山国莊は、戦前においては室町期朝廷の数少ない経済基盤の地として、戦後は惣莊―惣村二重構造の典型、あるいは中世後期村落の家・同族や村落内身分検討上の好事例として、一貫して注目を集めてきた。戦後以降の中世山国莊の研究を支えてきたのは、この地域に数多く伝来する、中近世の地下文書・家文書である。これらの文書の一部は、一九五〇年代末から六〇年代中頃にかけて野田只夫編『丹波国山国莊史料』^①、同編『丹波国黒田村史料』^②という二冊の史料集にまとめられ、その間／それ以後も、同志社大学人文科学研究所・國學院大學史学会中世史部会による中世文書を中心とした古文書調査が進められた。そして、九〇年代後半からは坂田聡が主宰する山国莊調査団による調査がはじまり、コロナ禍による中断を挟みつつも、今日まで続いている。^③

さて、中近世文書が大量に伝来する山国地域であるが、慶長から

元禄以前の古文書の残存は、意外なほど少ない。そうした中で、中近世移行期の山国地域のあり様を語る史料として早くから注目されてきたのが、この地域の鎮守である山国神社に所蔵される、寛文十年（一六七〇）八月吉日の日付を持つ「丹州山国境内之目録」（以下、「境内之目録」と略記）と題された文書である。^④同文書は卷子装され、「山国境内四封 際目証書外匣」と記された木箱（箱裏書には「享和二歳星次壬戌二月吉日 山国名主中」と記載）の中に保存されるなど、山国神社が収蔵する古文書類の中でも特に丁寧に扱われ、今日まで伝来してきた。そうしたこともあり、この「境内之目録」の内容は、研究者の間でもほとんど疑問を持たれることなく受容され、結果、中世山国莊の名体制下で成長した有力百姓Ⅱ名主は、近世以降も山国地域内での特権的地位を変わらず維持したとする歴史像が、長きにわたり、この地域の歴史研究の前提とされるに至ったのである。

しかし、山国神社所蔵の「境内之目録」（以下、「山国神社版」と表記）と、各家に保存された同文書の写とを思しき文書とを比較してみると、実はその内容には種々の違いがある。私見では、その違いは、「境

内之目録」の成立を寛文十年八月とすることの妥当性を問うものであるように思われる。そこで本稿では、まず「境内之目録」の内容を概観したのち、家別文書にある「境内之目録」の一つと山国神社版との内容比較を行っていく。その上で、「境内之目録」が寛文十年八月の成立とされていることの背景を問うことで、従来自明視されてきたこの地域の中近世移行期像の相対化を図りたい。

一、山国神社所蔵「境内之目録」の内容について

まずは、山国神社版を基に、「境内之目録」の概要を確認しておこう。本文書の冒頭、この目録作成の理由について次のように記されている。

一、丹州桑田郡山国之庄山々、隣郷堺目之証文並名主柚入之作法等般々雖多之、今鮮知其詳者、為恐後人愈爭論多季世增至廢失、寛文拾庚戌歲山国八箇村^{下村} 鳥居村 辻 塔ノ村 比賀江村 中江村 大野村 井戸村 小塩村及黒田村、但又黒田村ハ 先規ハ雖為一郷、前御代官五味 井戸村 令会合 備前守殿計トシテ今六ヶ村ニワカツ 一所奥山之由緒、隣郷境目並至名主柚之作法等所無其覺束者或訪問古老、或尋考遺跡、粗記之畢

※なお、文書作成後に付されたと思われる送り仮名、返り点は省略した。山国神社版については以下同じ

山国莊の山々と隣郷（の山々）との境目に関する証文や名主の柚入についての作法は複雑で、今はそれを詳細に把握している者は少ない。そこで、後世に争論が増えるのを恐れ、寛文十年に山国八か村と小塩村・黒田村で会合して奥山の由緒や隣郷との境目、名主柚の作法を確認し、また古老からの聞き取りや遺跡の考証も行い、書き記したのだ

という。

右に引用した部分の後に、馬場谷・蘇武谷（祖父谷）・西谷（以下、この三つをまとめて三谷と称す）・奥山の利用に関する名主の由緒が記される。その一部を、以下に引用したい。

一、山国名主者 大柚十五名半、棚見方二十三名、類主五十八人、各系図之証文鳥居ノ家ニ相伝也、此外小塩村・黒田之中二四名半有之歟 家々柚之印者、凡名主一家各一流、此先代所恩下賜之璽也、流家者宜用厥惣領之印変点之、

一、奥山柚入之事者、従名主役人之家唯出斧一丁之外、全不容入他柚、縦又雖名主之嫡子、最初柚入時者、於某村中遍有盃酒礼、謂之領家向此郷党親睦之儀乎

一、名主奥山出入之時、不意難、或有塞深雪路者、為黒田衆先達役、要往返之無妨、若又里山其有談合諸用使、則小塩衆勉此例也、是山国枝郷之証乎

引用部最初の一つ書きの中で、山国の「名主」は大柚方十五名半・棚見方十三名、「類主」五八人、それに小塩村・黒田村の四名半からなり、各家はそれぞれ先祖が下賜された印形を「柚之印」として使用している^⑤、と記されている。仲村研によれば、中世末期の山国莊の名は、名ごとに二人ないし三人の名主が存在しており、二八名半を合計六四人で所有していたという（仲村書一〇〇～一〇六頁）。「類主」五八人とは何を指すのか、仲村は特に見解を述べていないが、ここではさしあたり、寛文十年作成とされる文書の中で名主について右のような定義がなされていることを確認しておきたい

続く一つ書きでは、奥山には名主家の者でも「出斧一丁」すなわち当主以外は柚入りが許されず、嫡子をはじめて柚入りする際は村中へ「盃酒礼」を行わねばならないとされる。なお、この名主だけが柚入

りできるとの由緒は、別の由緒書では「斧役」と呼ばれている。^⑦

最後の一つ書きでは、名主が奥山に入る上で不都合があった際には黒田の者が先達役を務めること、入山中の者と連絡を取る際には小塩の者が使いを務めることが記され、かつそれらが、小塩村・黒田村が山国八か村の「枝郷」であることの証であるとされる。

続いて、「隣郷堺目山国之圏続」との項目が立てられ、山国郷の領域と、「馬場谷并西谷ノ分堺目」「蘇武谷ノ分」「奥山之分」ごとに山内部の村持ち・個人持ちの山林の境目が記される。その記載は極めて詳細で、すべてを引用することは到底できないが、試みに本稿で主に議論していく「奥山之分」の冒頭部を示してみよう。

奥山之分

一、船ヶ原山国領と大布施・八升両村と堺目ノ事、往還ノ道端ニ腰かけ岩ト云岩有、是指渡シニ東西両原共ニ尾限也、
堺ハ先年度々御公儀ニモ互ニ印之者也 腰かけ岩ノ領御改ノ大絵図

一、東原ふねか谷と云山国地下山ノ境ハ、右ノ両村ノ境腰かけ岩ヲ限、北ハふねか岩ヲ引まハし谷ノ出口今少上ニ大川ノ原、からとト云岩尾限也

一、西原ノ山国地下山境ハ腰かけ岩指渡ノ尾限ヨリ黒田境、山根ニ石塚并樫ソラハ尾限也

一、黒田与 中江村境、く、 測ノ谷へ入テ小瀧のかたノ尾指渡也
西原境通リ 井戸村境

（以下略）

右のような説明が三谷と奥山、それに黒田三か村の村山についてなされたのち、最後に、「右所記之数件品目者、三郷之長、上下残立合、四至傍示境、隣郷錯乱処及至奥山、柚入之古法、名主類家之印等逐一令吟味之、為残永代之証文、依旧例清書者也」と、この文書が山

国・小塩・黒田の村の者で立ち合いの上、山林の「四至傍示境」を確認・清書したものであることが示され、「于時寛文拾年庚戌八月吉日」の日付と、十か村住民計一五三名の署名（すべて同筆。捺印一二二名）がなされ、文書が閉じられている。

*

右に確認してきた「境内之目録」の内容に対する評価について、戦後の山国地域の歴史研究を牽引した仲村研の見解を確認しておきたい。なお、仲村が検討した「境内之目録」は、山国神社版のものではなく、大江嘉一氏所蔵のものであるという（九七頁）。

三谷と奥山の利用に関する名主の由緒については、惣莊山分割後の山林用益慣行を成文化し、また慣行の起源やそれに参加し得た階層を示そうとしたものであり、この文書が中世の記憶が残る寛文年間の作成であることも含めてその内容の信用度は高い、とする（八九頁）。また、斧役についても、後述の境目設定との関連で、各村に分割された斧役数が三谷・奥山分割の基準になった、と位置づけている（二五九頁）。

山国莊の莊域、三谷と奥山内の境目についてはどうであろうか。まず、莊域については、ほぼ信用できるものとしている（八七頁）。次に、境目については、この「境内之目録」の作成によって「両度（慶長十一年の三谷の山国八か村・小塩村への分割と、寛永七年の奥山の山国八か村・小塩村・黒田村への分割、吉岡注）にわたる惣莊山の分割を最終的に確認するとともに、分割した山の用益権をもつものを各村で確認するものであった」とし、「境内之目録」への署名者が、その時点での役式＝斧役所有者であった、と捉えている（二五九頁）。

以上、要するに仲村は、「境内之目録」の記載をほぼ全面的に正し、その内容を前提に、山国地域の中近世移行期

を検討していった。その結果、山国八か村と黒田村・小塩村は、本郷・枝郷という関係にありつつも、「名主」という集団の影響力の下で名体制が強固に維持され、また一つの惣荘としてのまとまりを保持しながら、荘内に惣村が登場してくるとする、いわゆる惣荘—惣村二重構造論を打ち立てるに至る（三六—三八六頁）。そして、仲村の研究は、氏以降の山国地域の歴史研究の前提とされてきたから、細部への批判はあっても、基本的には同様の理解の下で、この地域の中世後期・中近世移行期の歴史研究は進められ、今日に至っているのである。

ところで、仲村が利用した「境内之目録」は大江嘉一家所蔵の者であったことは前述したが、この点に関連して仲村は、「この目録（「境内之目録」のこと・吉岡注）は惣荘山分割後、その用益に参加した各村の旧名主を中心とする役職所有者がすべて保存したものであり、現存する多くの目録は、元禄十一年（一六九八）梶井宮門跡領、旗本田中内匠領が新たに設定された後、元禄十三年に惣荘山分割地域の再確認のために作成された写である。」と述べている（九七頁）。仲村が、「境内之目録」を斧役所有者すべてが保存している、と主張する具体的根拠は不明だが、現存している「境内目録」の多くが元禄期の写であるという指摘は、なぜ寛文十年当時は写が作成されず（あるいは、後世に残らず）、元禄期の写だけが残るのか、という疑問を即座に生じさせる。残念ながら、筆者は、現状、仲村が利用した大江嘉一家所蔵の「境内之目録」を確認できていないが、幸いにも山国莊調査団がこれまで調査を行ってきた家々の中で、「境内之目録」を所蔵していた家がほかにも確認できた。次章では、「境内之目録」相互の比較を行い、内容の相違とその意味を考えていくこととしたい。

二、「境内之目録」の比較

二〇二一年十一月現在までに山国莊調査団として調査を行ってきた家々の中で、「境内之目録」の存在が確認できているのは、「高室美博家文書」（以下、高室家版）⁸「河原林成吏家文書」（以下、河原林家版）⁹の二つである。このうち、高室家版は、奥書に「右山国本証文之通少も無相違書写サセ遣シ申候、為其如此二候、以上 宝永四年亥十月廿三日 丹波山国庄 塔本伊左衛門（印） 桂二而 野上次左衛門殿へ」と記載されている。塔本、野上ともに「名主」の家の苗字だが、「桂二而」の意味は判然としない。また、宝永四年という時期が持つ意味も不明であるが、この奥書以外は、山国神社版とほぼ同じである。

一方、河原林家版は、山国神社版・高室家版と比べた場合、一部の記載に明確な違いがある。以下、河原林家版と山国神社版の比較を行っていくこととしたい。

（一）内容上の違い

既に第一章で述べたように、「境内之目録」には、三谷と奥山の村持ち・個人持ちの山林の境目が記されている。このうち、個人持ちの山林に関して、所持者の名前が、山国神社版と河原林家版で異なる箇所が複数存在する。

【表】は、所持者の異なる箇所をまとめたものである。名前が異なる箇所は、合計で十四か所である。そのうち十二か所は蘇武谷のもので、その大半が小畠善左衛門から小畠了左衛門、藤野久左衛門から「加右衛門」に変更されている。「加右衛門」は、延宝七年（二六七九）に

【表】 山国神社版・河原林家版の個人持ち山林記載の相違比較

場所	山国神社版	河原林家版	備考
1	西馬場谷並 一、常照寺分与下村境溝ヶ谷口ノ奥ノ尾限但シ下村分ハ小塩村半右衛門所持也	一、常照寺山ト下村境溝ヶ谷口ノ奥ノ尾限也小塩村長左衛門所持	
2	一、三村山与比賀江村境小塩越ノゆりさき（中略）此三村ノ分ハ塔村佐次右衛門・井戸村加兵衛所持也	一、三村山ト比かへ村境小塩越のゆりさき（中略）此三村山ノ分塔村佐次右衛門所持也	
3	中江村分 一、いもしたノ谷口ノ奥ノ尾ハ中ノいらか坂ノ奥ノ尾（中略）小畠善左衛門・麴屋十助・同半兵衛所持也	中江村分 一、いもした出口ノ奥ノ尾ハ中ノいらか坂ノ奥ノ尾（中略）小畠了左衛門・善左衛門・麴屋重介・半兵衛所持也	
4	辻村分 一、ときん岩谷水流奥ノ両谷皆敷藤野半右衛門・同久左衛門・麴屋十助・同半兵衛所持也	辻村分 一、ときん岩ノ谷水流両谷皆敷藤野半右衛門・加右衛門・麴屋重助・半兵衛所持也	
5	中江村分 一、岩尾ハゑほしかたノ岩ノ指向ノ坂わけ限小畠善左衛門・麴屋十助・同半兵衛所持也	中江村分 一、岩尾ハゑほしがたノ岩ノ指向ノ坂わけ限小畠了左衛門・同半兵衛・麴屋重介・同半兵衛所持也	
6	中江村分 一、ほうヶ谷出口ノ尾ハかせ谷ノ（中略）小畠善左衛門・かうしや十助・同半兵衛所持也	中江村分 一、ほうが谷出口ノ尾ハかせ谷ノ（中略）小畠了左衛門・善左衛門・辻村重介・同半兵衛所持也	「かうしや十助」と「辻村重介」は同一人物か
7	ひかへ村分、是ハ笠岩ノ谷也 一、立岩ハ笠岩ノ谷へ（中略）小畠市良左衛門・麴屋十助・塔村佐次右衛門所持也	ひかへ村分 一、立岩ハ笠岩ノ谷へ（中略）塔村佐次右衛門・小畠了左衛門・辻村重介所持	「麴屋十助」と「辻村重介」は同一人物か
8	蘇武谷（祖父谷） 辻村分、此内ニ塔村トモ今ハほうヶ坂ノ替地ニ辻村へ渡ス也 一、是ハ笠岩ノ奥（中略）辻村十助・半兵衛・半右衛門・久左衛門所持也	辻村分 一、是ハ笠岩ノ奥（中略）辻村十助・半兵衛・半右衛門・加右衛門所持也	
9	辻村分 一、是ハゆり道のきつ立ノ尾限（中略）十助・半兵衛・半右衛門・久左衛門所持也	辻村分 一、是ハゆり道きつ立ノ尾限（中略）辻村重介・半兵衛・半右衛門・加右衛門持	
10	辻村分 一、是ハそふ谷と小蘇武谷と出合ノ尾迄十助・半兵衛・半右衛門・久左衛門分也	辻村分 一、是ハそふ谷と小そふ谷と出合ノ尾限重助・半兵衛・半右衛門・加右衛門所持也	
11	辻村分 一、是ハ小畠コノ尾限十助・半兵衛・半右衛門・久左衛門所持也	辻村分 一、是ハ小畠この奥ノ尾限麴屋重助・半兵衛・半右衛門・加右衛門持也	
12	辻村分 一、是ハなべくら谷ヲ引まハシ（中略）十助・半兵衛・半右衛門・久左衛門所持也	辻村分 一、なべくら谷ヲ引廻シ（中略）重助・半兵衛・半右衛門・加右衛門	
13	塔村・辻村相合也 一、西かふりノ谷出口ノ尾限谷ノ木流皆敷塔村分ハ佐次右衛門・井戸加兵衛・辻村分八十助・半兵衛・半右衛門・久左衛門所持也	二ヶ村分 一、西かふりの谷出口ノ尾指渡水流皆敷塔村・辻村相合也 但塔村分ハ佐次右衛門・加兵衛・辻村分八十介・半兵衛・半右衛門・加右衛門所持也	
14	塔村分辻村へ渡スほうか谷ノかへ地也 一、是ハ瀧ノ尾限辻村十助・半兵衛・半右衛門・久左衛門所持也	一、是ハ瀧ノ尾限本割ハ塔村ニ而候へ共ほうが谷と引かへ今辻村重助・半兵衛・半右衛門・加右衛門所持也	

※一重下線は山国神社版から名前が変更されているもの、二重下線は山国神社版でしか名前が見られないものを示す。なお、同名の異字表記については不問とした

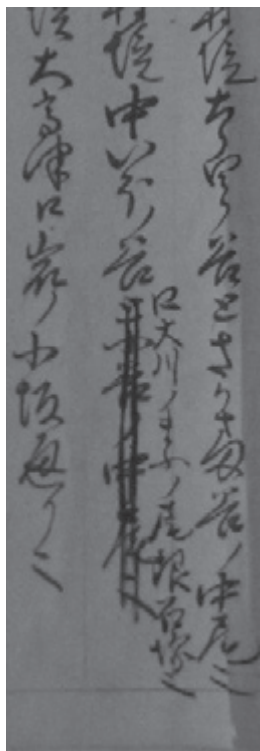
「長戸谷」を買得した際に地下中に提出した一札の差出に「かい主ふしの加右衛門」と記されていることを踏まえると、藤野姓である可能性が高い。小嶋了左衛門・加右衛門への記載の変更は、家督相続や分家などの結果と予想される。山林所持者の記載の違いは、いずれかが（あるいは、いずれかの原本が）まず作成され、もう一方は、後年にその原本ないし写を基に内容を更新したものと見るべきであろう。

（2）どちらが先に作成されたものか

山国神社版・河原林家版が別の時期に作成されたものだとすると、いずれがより早く作成されたものだと見るべきか。次に、この点を検討したい。

山国神社版には、記載に若干の修正が施された箇所がある。それが「写真1」である。「と小谷ノ中尾也」の部分が抹消され、その横に「口大川ノまふノ尾限石塚也」と修正されている。一方、河原林家版では、山国神社版で抹消されていた箇所がそのまま記載され、修正はない。このことから、河原林家版は、山国神社版に先行して作成された文書でないしその写であるのが見えてくる。

【写真1】



この点を、別の観点からも確認しておきたい。以下は、山国神社版、河原林家版の本文末尾の記載を並べたものである。

《山国神社版》

以是山国・小塩・黒田之衆中、退私利、無上下無少長、凡境内山林所持之輩、其外公役之百姓一斉令連判畢、猶依恐後人之疑惑、備他日之証覽如此 ※傍線は筆者による

《河原林家版》

以是山国・小塩・黒田ノ衆中、退私利、憶公道、無上下無少長、凡於境内山林所持之輩二ハ一斉二令連判畢、猶依恐後人之疑惑ヲ、備他日之証覽如此

傍線部に注目したい。文書に連判した者が、河原林家版では「境内山林所持之輩」となっているのに対し、山国神社版では、そこに「其外公役之百姓」が加わっているのである。

実際の署名者数は、どうだったであろうか。河原林家版は、個別の署名は省略され「名主並惣百姓 連判百廿余人」とまとめられている。一方、既に述べた通り、山国神社版は十か村合計で一五三名の名前が記されており、河原林家版に記された概数を信じるならば、三〇名ほど署名者が多いこととなる。

一般的な傾向として、近世農村では、時代が下るほど住民の平準化が進む。山国郷もその例外ではなく、十八世紀になると「名主」と平百姓との争論が郷内各村で起こるようになり、鳥居村では、元々は「名主」が独占していた庄屋職が、寛政期になると「名主」以外の者も務めるようになっていた。¹¹⁾ また、「名主」自体も、十八世紀後半以降、分家や新家の取り立てを行い、その数を増やしていた。¹²⁾ これらのことを考慮すれば、山国神社版での署名者数の増加は、この文書が、河原林

家版よりも後に作成されたものであることを示しているといえるのではない。「其外公役之百姓」という言葉が山国神社版に挿入されているのも、この署名者数の増加を反映してのものであったと考えられよう。

三、「境内之目録」の日付はなぜ寛文十年なのか

前章での検討から、「境内之目録」の内容が更新されていること、山国神社版は、河原林家版よりも後の時期に作成されたものと考えられるのを確認した。次に検討すべきは、両文書の作成時期がいつ頃なのか、という点であろう。しかし、先に述べておくと、両文書いずれも、その作成時期を確定するのは現状では難しい。ここでは、「境内之目録」の作成年が寛文十年とされている背景をいくつかの点から考察する作業を通じ、先に作成されたと考えられる河原林家版の作成時期の下限を推定するに止めたい。

（1）村山をめぐる黒田三か村と周辺諸村との争論

寛文十年は、黒田三か村とその隣村の片波村との間で、山の領有をめぐる争論が発生した年であった。争論さなかの同十一年七月に黒田三か村から京都代官五味前九郎に宛てて出された文書によれば、黒田三か村が毎年「片波谷」から杉や檜を嵯峨・桂へ販売し、また雑木を薪にするなどしていたところ、「片波村分新儀をたくみ」^{〔トスケ〕}、寛文十年五月十二日に、当時の京都代官鈴木伊兵衛に対して訴状が提出されたという。争論は、同十二年六月、黒田三か村から片波村へ「黒田山片波谷之内こせ山壺ヶ所・桂が谷壺ヶ所・かす立谷壺ヶ所右合三ヶ所」を

永代譲渡することと落着いた。^{〔14〕}

寛文期の黒田三か村と片波村の争論の顛末を確認したが、「井本正成家文書」の中に、争論がはじまったのと同じ寛文十年の六月吉日の日付を持つ文書が存在している。^{〔15〕}

一、のふみ谷小塩村と宮村之際目ハ、北ハ桂力谷之水落指渡大岩通

一、^{同所}上黒田と宮村と之際目ハ、岩力谷之口流尾通

一、^{同所}上黒田と下黒田と之際目ハ、岩力谷水落之尾通

一、^{同所}下黒田村と上黒田と之際目ハ、ひとせ谷之水落尾通

一、上黒田と下黒田と之際目ハ、ひとせ谷水落之尾通

一、^{南原等}下黒田村と上黒田之際目ハ、ひとせ谷下むかいの尾通

一、^{南原等}上黒田と宮村之際目ハ、信濃谷口大川奥之張尾通

一、宮村と小塩村と之際目は、西桂力東桂之中尾通也

以上

片波谷三有之黒田三ヶ村之山堺之寛

一、桂力谷指迎山之神之尾通、西谷大小床小さこ下之尾通マテ

右之内二三ヶ村之瀬き山有之、亦山城谷ハ上黒田之宮山也

一、宮村と下村と之際目ハ、同小さこ奥の尾通

一、下村と上村と之際目ハ、岩力谷之口之水落

一、上村と宮村とさいめは、しらくら谷とつふせ力谷と之中尾通

一、宮村と上村と之際目ハ、西谷東谷落合之尾通

右之内二三ヶ村之瀬き山有之

一、上村と下村と之際目ハ、大なめら谷之谷わけ

一、下村と上村と之さいめハ、しやぬけ谷直谷との中尾通

一、上村と下村と之さいめハ、直谷小まのこさこ通

一、下村と宮村と之際目ハ、大原谷口落合之尾通

一、宮村と上村と之際目ハ、なべ谷口之大川之岩之尾通

一、上村と^高宮山境ハ、山城谷之口之上むかい之尾通

一、宮村と下村と境ハ、かうじ谷口尾通

一、下村と宮村と際目ハ、大川之大岩通

一、宮山と上村と之際目ハ、かす立谷之下大川どんと滝通也

いさなみ谷ニ有之黒田三ヶ村山之際目之覚

一、たけじ谷鞍馬黒田山之際目、紅葉カきこつ、らかさこ

一、^同芹生村と黒田と之際目ハ、杉谷へ入テ之滝通

一、いさなみノ奥芹生と黒田と之際目ハ、北ハ小き^{いさなみ}之谷わけ、南ハ大いさなみノ口之尾通也

以上

寛文十^{庚申}年六月吉日

黒田三ヶ村

詳細は不明だが、奥山が各村に分割された際、黒田三か村に対しては、三か村個々ではなく、「黒田村」単位で分割された。そのため、三か村は、黒田村として分割を受けた山林を、改めて三か村に分割する必要があった。右に引用した史料は、奥山の「のふみ谷」⁽¹⁶⁾（能見谷）、それに黒田の村山である片波谷、「いさなみ谷」（伊佐波山）について、三か村それぞれの村持ち分の区割りを示したものである。

なぜ右の史料を示したのかというと、実は河原林家版の中に、この史料を底本にしたと見られる箇所が存在しているからである。紙幅の関係で引用はできないが、たとえば引用部最初の一つ書きに相当する部分は、河原林家版では「一、小塩村堺桂が谷水流ノ大岩今岩が谷ノ口ノ流尾迄宮村分」と記載されている。文言等に若干の相違はあるものの、内容的には同じであると見て差し支えない。

問題は、右の文書が寛文十年六月に作成されたことの信憑性である。既に見た通り、片波谷については、この年の五月より片波村との間で争論がはじまっていたので、その対応として、争論開始翌月である六月に、黒田三か村それぞれの片波谷の領有範囲を確認した可能性はあるであろう。ただ、能見谷と伊佐波山については、この年に相互の領有範囲を確認する必要があるような事態を、管見の限り確認できない。

注目したいのは、能見谷と伊佐波山が、いずれも延宝期以降に黒田三か村と他村との間で係争地になる場所であることである。年代の近い順に述べていくと、まず伊佐波山に関して、その内部の谷（上穴谷・峠之谷・小峠谷・松尾谷・市之谷・樋谷）の帰属をめぐり、延宝六年から灰屋村と黒田三か村の間で争論が起きる。このうち、上穴谷は灰屋村、松尾谷・市之谷・樋谷は黒田三か村のものとなり（小峠谷・峠之谷については不明）、後者の三つの谷については、争論以前と同様、灰屋村から山役銭が三か村に支払われた上で灰屋村が利用を続けることに決まった。しかし、この山役銭の支払いに灰屋村側は納得せず、その後も元禄期と享保期に相次いで争論が起きるのである。⁽¹⁷⁾

奥山の能見谷では、貞享二年（一六八五）に「朽木監物様御下之久多村之百姓押領ヲ致シ、我がま、二山へふみ込、当年大分ニ杉・丸太盗切取」という事件が起こった。この事件は、翌三年に再び山に入ってきた久多村の者を捕らえたことで解決したようであるが、その後も久多村の住民の横領は絶えなかったようで、元禄四年、九年にも同様の問題が発生し、久多村から詫言状を取っている。⁽¹⁸⁾

このように、伊佐波山と能見谷が黒田三か村と他村との間で係争地となるのは、寛文十年よりも後の時期であった。推測の域を出ないが、先に引用した文書が寛文十年六月の日付となっているのは、文書を作

成した際、その成立年を、片波谷をめぐる争論が発生した年に遡及して記述したためではないか。同じ「井本正成家文書」の中に、奥山と片波谷の境界を記した天和二年（一六八二）二月十三日付の覚書が存在しているのは、この推測が決して荒唐無稽なものでないことを示しているように思われる。¹⁹⁾

なお、これまで河原林家版との関わりだけを述べてきたが、山国神社版では、片波谷に関する記述は全くなく、伊佐波山については一つ書きで一つ、能見谷については九つに分けて記載されている。片波村との争論は、現状、寛文期以降は確認できないが、先述したように灰屋村との争論は享保期まで続き、能見谷を含めた広河原村との争論は、近世期を通じて継続する。²⁰⁾ 山国神社版での記載の変化は、このことと何らかの関係があるのかもしれない。

（2）奥山分割に関する十か村取り決め

寛文十年は、山国八か村・小塩村・黒田村の間で奥山の分割に関する取り決めを結んだ年でもあった。次に、この点について見ていく。²¹⁾

相究申一札之事

一、奥山者、従往古山国八ヶ村・黒田村・小塩村合拾ヶ村惣山に而御座候処二、四十ヶ年以前、此山十ヶ村配分仕、則先規従御公儀様御定被成候国役人足数二割請所持仕候儀、無紛候、此谷之依所二少ツ、空地御座候得共、是ハ分付不申致各別之儀二付、拾ヶ村之空地二而御座候、尤筏場・小屋場・かま床以下二至迄、十ヶ村之立合互二違乱有間敷候、為其庄屋・年寄判形仕候、仍末代証文如件

寛文十年戊三月廿一日

（十か村庄屋・年寄名前略）

まず、奥山はかつて十か村の惣山であったが、四〇年程前に、公儀より課された国役人足数に準じて十か村に分割したのだという。奥山を、国役人足数を基準に分割したとの説明は、管見の限りこの史料以外には見られず、非常に興味深い。誰が請け負うかは別として、分割自体は中世山国荘の名体制などとは全く無関係に、国役という徳川氏による国家的役賦課の論理²²⁾に則って行われたことを、この記載は示しているのではないだろうか。

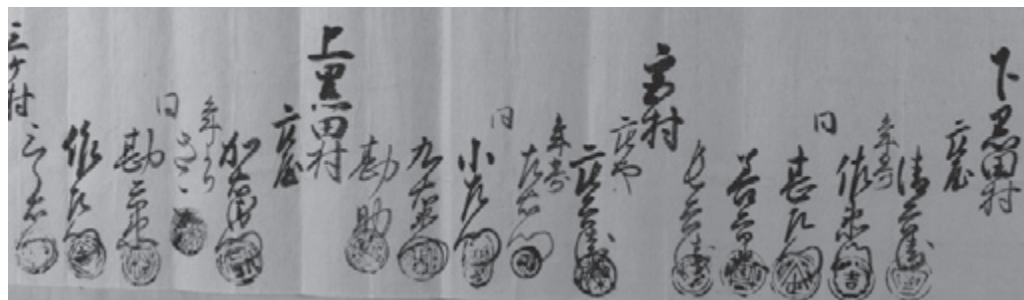
その上で、文書では、配分した山々の間には「空地」が存在していること、「空地」は十か村のものであり、筏場などを作る際には必ず十か村の人間が立会うことを互いに誓約している。個々の村々の所有となる山林の間に、いずれの村にも属さない「空地」を設けることで、村々の間で領域をめぐる争いが生じないように配慮していた様子が窺える。「境内之目録」が作成されたとされる寛文十年は、奥山の村ごとの区割りについて、このような取り決めを確認し、文書化した年だったのである。

しかし、この「空地」の確認とは、見方を変えれば、奥山には各村の領域を厳密には設定しないことの確認であった、ともいえる。そのような確認を十か村で行った五か月後に、第一章で見たような細かい境目設定が、果たして行われるであろうか。この点から見ても、「境内之目録」が寛文十年に作成されたものであるとは到底考えられないのである。

（3）山国神社版「境内之目録」の署名について

最後に、山国神社版の巻末に記載された一五三名分の署名について検討したい。

【写真2】

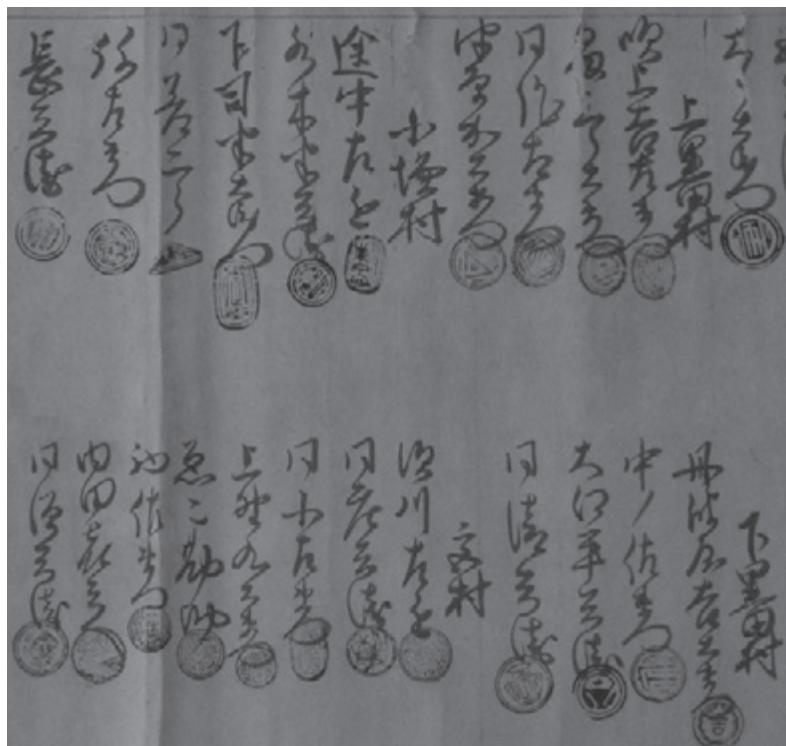


先にも記した通り、この署名はすべて同筆で書かれているが、名前は

自体は、寛文期に実在した人々のも
のが書かれているように思われる。
次に示した二つの写真は、先述の黒
田三か村と片波村との争論の際に
作成された、寛文十二年四月付の京
都町奉行所宛の訴訟文書案文に記
された署名【写真2】と、山国神社
版の黒田三か村の署名部分【写真3】
である。二つの文書の署名は、上黒
田村では加右衛門・作左衛門・三良
右衛門の三名、宮村では庄兵衛・小
左衛門・九右衛門・勘助の四名、下
黒田村では清兵衛・佐衛門の二名が
一致している。

ただ、両写真の印判に注目しては
しい。上黒田村では、作左衛門のも
のは同一といえるものの、加右衛門
は明確に異なる（三良右衛門は判
別しがたい）。宮村では、庄兵衛・
小左衛門・勘助の印判は同一のもの
と判断できるが、九右衛門のものは
あきらかに違う。下黒田村では、山
国神社版で丹波屋吉右衛門の印と
して使用されているものが、訴訟文

【写真3】

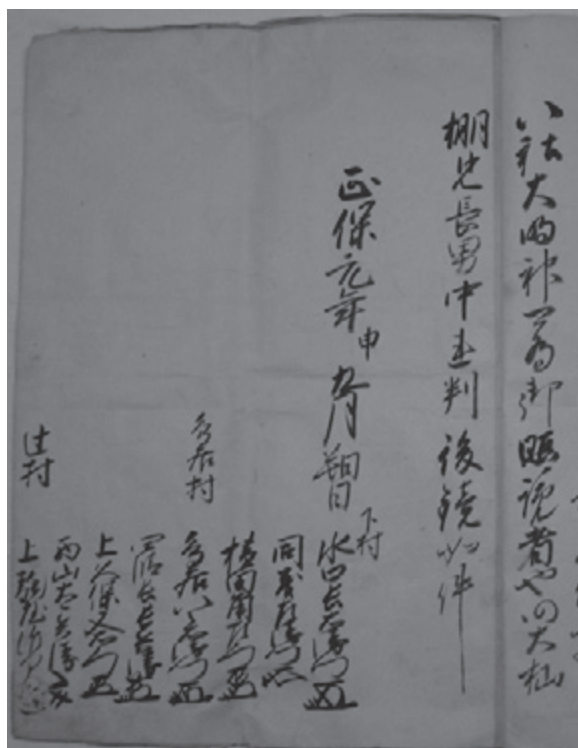


書の方では年寄佐衛門の印として捺されている。また、清兵衛の印も、
どちらも花瓶の彫刻したもので、似てはいるものの、印の縁取りが山
国神社版では二重、訴訟文書では一重であり、別の印判だと判断できる。
右のように、両文書には、同一名の者に別の印判が捺されているも
の、あるいは、一つの印判が別名の者に用いられているケースもある。

千葉真由美によれば、印判の選択は当主の意思次第であり、代々継承される場合もあれば代替わり後に変更される場合もあるなど、様々であった。また、近世初期には、同じ印を複数の者が用いる場合もあったという⁽²³⁾。よって、同一名の者が同じ印判を用いていないことや、一つの印判を別名の者が用いていることが、直ちに文書の信憑性を揺るがすとはいえない。しかし、わずか一年八か月の間に、印判の変更が複数の家で行われたと想定するのも無理がある。やはり、両文書のうちのいずれか、本稿のこれまでの議論を踏まえるならばおそらくは山国神社版の方が、日付の時代に作成されたものであることを装うために、その時代に実在した人物の名前を記し、かつ可能な範囲で、その人物が用いていた印判を捺していた、と見るのが妥当ではないか。

そのような手の込んだ作業を果たしてこの時代の人々が行い得たのか、なお疑問とする向きもあるであろう。そこで、そうした作業が実際に山国地域で行われていたことがわかる史料を、一つ紹介しておきたい。【写真4】は、山国神社に所蔵された、「御宝殿奉籠山国庄校割之書物」⁽²⁴⁾との表題を持つ文書の日付と署名の箇所である。鳥居村の箇所に見える鳥居八良右衛門や四段長兵衛といった名は、「鳥居等家文書」中にある正保年間の売券の中に名前を確認でき、また、写真よりもあとの丁に記載された井戸村の江口勘兵衛なる人物も、「江口家文書」中の系図に正保年間の人物として名前が確認できる⁽²⁵⁾。そして、署名の下に描かれた花押が、この文書が記載通り正保元年（一六四四）九月一日に作成されたものであることの信憑性を増すのに一役買っている、といえる。結果、この文書は「この時期に再編成された山国本郷八カ村五社明神の宮山の全貌を示している」などと評価され、十七世紀前半の山国神社宮山の実態を示す史料として利用されてきた⁽²⁶⁾。し

【写真4】



かし、この文書は偽文書と断言できる。なぜなら、正保改元はこの年の十二月のことであり、九月ははまだ寛永二年であるからである。

文書中に「右件之田畠山林三十ヶ所之分、当郷五社八社大明神八ヶ村之鎮守寺社之修理並神主名主領分之定帳面に載せ」とあることから、この文書は山国神社の座衆である「名主」が作成したものと見て間違いない。つまり、「名主」達は、花押まで用いて文書の歴史性を演出することで、彼らがこの地域で有していた権益の維持・確保を図ろうとしていたのである。第一章で見た通り、「境内之目録」には「名主」の由緒が細かく記されており、やはり「名主」が作成したものと考えられる。「境内之目録」もまた、「御宝殿奉籠山国庄校割之書物」と同

種の目的から、寛文期以降のある時期に「名主」達によって作成され、そこから更新を重ねてきたと見るべきであろう。

*

以上、三節に分けて、「境内之目録」が寛文十年成立とされている背景をさぐってきた。寛文十年という年は、山林の所有をめぐり、山国地域でいくつかの大きな動きがあった年であったことは確かである。しかし、それをもって「境内之目録」が寛文十年に作成されたものと考えすることはできない。(3) で見たように、この地域の有力百姓集団である「名主」は、署名や印判を、日付に合わせて記載していく程度の文書作成力を有していた。「境内之目録」は、このような技術を用いて作成されたものだった見るべきであろう。(1) で検討した点を踏まえるならば、先行して作成されたと考えられる河原林家版の成立は、早くても貞享・天和期以降のことだったのではないだろうか。

おわりに

以上、検討してきたように、「境内之目録」は寛文十年に成立したとはみなしがたく、その成立は、早くても貞享・天和期以降であったと見るべきである。とすれば、これまでこの文書、それに研究史上「山国莊名主家由緒書」と称される由緒書の内容を基に山国中世史研究の前提とされてきた、中世期の山国莊には山国八か村に二八名半、小塩村・黒田村に四名半の名跡があり、山国と黒田・小塩は、本郷・枝郷という関係にありながら、この名跡を持つ「名主」という集団の影響の下、一つの惣荘としてまとまっていた、との理解は、果たして成り立つであろうか（なお、「山国莊名主家由緒書」の成立を、筆者は

十九世紀以降と見ている⁽²⁸⁾。

既に指摘されているように、中世山国神社の宮座には小塩村・黒田村の住民は参加しておらず、黒田には一貫して宮座が別個に存在していた⁽²⁹⁾。また、筆者は別稿において、山国八か村の中で「名主」という社会集団が誕生したのは元禄期であり、禁裏御料七か村で京都代官所公認身分としての「名主」が禁裏御料七か村の中に誕生したのは寛政期であることを指摘した⁽³⁰⁾。これらの点も踏まえて考えると、中世期段階から山国と小塩・黒田の有力百姓が一つの社会集団を形成していた、と見るのは、現状では無理のある理解だといわざるを得ない。

従来の中世山国莊の研究では、「名主」という集団を核とする惣荘の一体性を前提に、山国と黒田それぞれに残存した中世史料を、いずれも山国莊の中世を語る史料として、特に区別されることなく用いてきた。しかし、両地域の住民が、それぞれ別の社会集団を構成していたとすれば、そのような史料の利用の仕方は、結果的に、中世山国莊の「実態」からは乖離した歴史像を構築してしまう。今後、この地域の中世史研究を行う者は、そのことを意識しておく必要があるであろう⁽³¹⁾。

また、「境内之目録」の作成によって三谷・奥山の分割を最終確定し、かつそれに寛文十年当時の役式所有者が署名した、との理解も、当然、今後は修正される必要がある。関連して、「境内之目録」に直接記載されているわけではないが、近世初期の惣荘山分割が各村落に在住する斧役負担者の数を基準に行われた、という理解も、再考されるべきであろう。少なくとも、山国神社版の署名者を、「名主」や後世に作成された由緒書類に見られる「京上歩持役」の後裔と想定して議論を組み立てていくことはもはや意味をなさないことを強調し、本稿を閉じたい。

註

- (1) 史籍刊行会、一九五八年。以下、『山国』と略記。
- (2) 黒田自治会村誌編纂委員会、一九六六年。以下、『黒田』と略記。
- (3) 詳細は、坂田聡「山国地域史のあらましと研究の軌跡」（同編『禁裏領山国荘』高志書院、二〇〇九年、所収）を参照のこと。
- (4) 「山国神社文書」三一—二七—。
- (5) それに続く「流家者宜用厥惣領之印変点之」の部分は解釈に苦しむが、さしあたり「絶家を継いだ者はその総領の印を代用している」と解しておきたい。
- (6) 仲村研『荘園支配構造の研究』（吉川弘文館、一九七八年）。以下、本文中の頁数はすべてこの著書のもの。
- (7) たとえば、『山国』史料番号三四九（いわゆる「山国荘名主家由緒書」など）。
- (8) 「高室美博家文書」C。なお、本文書は、高室家に伝来したものではない。
- (9) 「河原林成史家文書」一。なお、表題は「山国領分境内之目録」となっている。
- (10) 「山国神社文書」一一—三五。
- (11) 拙稿「中近世『名主』考」（坂田聡編『古文書の伝来と歴史の創造』高志書院、二〇二〇年、所収）など参照。
- (12) 竹田聰洲「郷氏神の宮座と同族規制」（『村落同族祭祀の研究』竹田聰洲著作集第五巻）国書刊行会、一九九六年、所収。
- (13) 以上、「宮春日神社文書」四。
- (14) 「宮春日神社文書」十七。なお、上黒田春日神社所蔵の本文書写が、『山国』に採録されている（史料番号四二二）。
- (15) 「井本正成家文書」三一—五。なお、ほぼ同じ内容・文言の文書が『黒田』の「菅河誠家文書」の中に採録されているが（史料番号一九九）、そこには月が書かれていない。
- (16) 史料中の能見谷の項の中に出てくる「南平」という地名の所在は現状確認できていないが、その一つ書の中に出てくる「信濃谷」は能見谷の中の一部であることが別の史料から確認できるので（『黒田』史料番号五七九、「南平」も能見谷の中の一部であることは間違いない）。
- (17) 以上、坂田聡『家と村社会の成立』（高志書院、二〇一一年）第一章「由

緒書と偽文書」、『黒田』史料番号三三六—二四〇、二四二。

(18) 以上、「宮春日神社文書」二〇—二四、「黒田」史料番号七—一〇。

(19) 『黒田』史料番号三四一、三四二。

(20) 大貫茂紀「近世山国地域における境界認識と由緒」（坂田編前掲『古文書の伝来と歴史の創造』所収）、富井康夫「近世枝郷広河原村の土地保有と抵抗」（同志社大学人文科学研究所編『林業村落の史的研究』ミネルヴァ書房、一九六七年、所収）など参照。

(21) 「山国神社文書」五—七〇。

(22) 近世初期の国役については、高木昭作『日本近世国家史の研究』（岩波書店、一九九〇年）参照。

(23) 千葉真由美「近世百姓の印と村社会」（岩田書院、二〇二二年）参照。

(24) 「山国神社文書」一一—五七—。

(25) 「鳥居等家文書」二—一九八—ほか。

(26) 「江口九一郎家文書」A—二。なお、同文書によれば江口勘兵衛は分家である。

(27) 本吉瑠璃夫「先進林業地帯の史的研究」（玉川大学出版部、一九八三年）、六七—七〇頁。引用は六七頁。

(28) 拙稿「十八世紀丹波国桑田郡山国郷における由緒書の編纂と『郷土身分』（カルチュール）十五—一二〇二年）参照。

(29) 仲村前掲『荘園支配構造の研究』八八—九三頁。蘭部寿樹「村落内身分の地域分布と開発」（坂田編前掲『禁裏領山国荘』所収）。

(30) 前掲拙稿「中近世『名主』考」。

(31) この点、村上絢一が、山国荘単位での共有文書が伝来しなかった理由を探る中で「中世において、本郷と枝郷を併せた『山国荘』の領域が住民に認識され、またその全荘園的な結合が深められたことは、いよいよ想定し難い」との指摘を既に行っている（同「山国地域の文書と社会」、坂田編前掲『古文書の伝来と歴史の創造』所収。引用は三—五頁）。本稿の検討は、この村上の指摘を傍証したことになるであろう。

《付記》

本稿で利用した未刊行史料の利用にあたっては山国荘調査団までご連絡いただきたい。なお、本研究はJSPS科研費20K00966、21H00570、21H00571の助成を受けたものである。